東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

小中英語教育における連携カリキュラムの開発：これまでの留学生との交流活動の実践の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 香, 阿部, 始子, 青柳, 有季, 大里, 信子, 荻原, 真也, 林, 正太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173421

小中英語教育における連携カリキュラムの開発

― これまでの留学生との交流活動の実践の検討 ―

中村　香[1)]（代表者）　阿部　始子[2)]　青柳　有季[3)]　大里　信子[1)]　荻原　真也[3)]　林　正太[4)]

1）東京学芸大学附属小金井小学校
2）東京学芸大学教育学部
3）東京学芸大学附属小金井中学校
4）東京学芸大学附属学校運営部

目　　次

1．研究の目的 …… 32

2．研究の内容 …… 33

3．研究の計画 …… 34

4．先行文献研究 …… 34
　4．1．学校教育での「国際理解」教育 …… 34
　4．2．学習指導要領『小学校外国語教育』 …… 35
　4．3．新学習指導要領『中学校外国語教育』 …… 36
　4．4．英語教育における小中連携 …… 37

5．研究の実際 …… 39
　5．1．小学校のこれまでの留学生との交流活動の実践 …… 39
　5．2．中学校のこれまでの留学生との交流活動の実践 …… 43
　5．3．小中連携カリキュラムに向けての検討 …… 47

6．研究の成果と今後の課題 …… 47

7．参考文献 …… 48

東京学芸大学附属学校　研究紀要　第 48 集

小中英語教育における連携カリキュラムの開発

― これまでの留学生との交流活動の実践の検討 ―

中村　香[1)]（代表者）　阿部　始子[2)]　青柳　有季[3)]　大里　信子[1)]　荻原　真也[3)]　林　正太[4)]

1）東京学芸大学附属小金井小学校
2）東京学芸大学教育学部
3）東京学芸大学附属小金井中学校
4）東京学芸大学附属学校運営部

1．研究の目的

本研究では，これまでの実践研究及び先行研究等を踏まえ，児童生徒にとってよりよい学習環境となる英語教育カリキュラムを，留学生との交流活動の視点から小学校と中学校が連携して作成し，そのカリキュラムの有効性について検討することを目的とする。これまでに，留学生との交流活動の実践の視点から小中連携のカリキュラム検討を行っている研究は多くないため，本研究が，外国人との交流活動をテーマとした学習への一助となることも狙いとしている。

本研究の背景の一つに，社会情勢がある。近年，人や物，情報などの流動が国を超えて急速にグローバル化しているだけでなく，昨今，異常気象や自然災害，地球温暖化，紛争，貧困問題や新型コロナウィルスなど，国境を越えた地球的課題の解決や実現に向けて，世界の国々がいかに持続可能な「共存・共生」社会を築いていくかが問われている状況である。このことについては，2015年9月の国連サミットで採択されたSDGs（Sustainable Developmental Goals）においても，2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標として，17のゴール・169のターゲットが示されており，地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っている。 外務省のホームページでは，「SDGsは発展途上国のみならず，先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）なものであり，日本としても積極的に取り組む。」とある。これにより，教育現場でのSDGs的観点に立った学びにも期待が高まっており，外国語教育においても例外ではない。

別の背景として，平成29年度に告示された小学校の新学習指導要領が全国的に全面実施となり，今年度より小学校外国語が教科化されたことがある。さらに，来年令和3年度からは，中学校の新学習指導要領も完全実施となる。学習指導要領の改訂では，これまで以上に，小学校，中学校，高等学校といった各学校種段階への児童生徒の学びをスムーズに接続させることが，重要な観点として示された（文部科学省，2017a）。このことは，学習指導要領の目標にも表れている。新学習指導要領で示されている目標は，以下のとおりである。

小学校 外国語活動	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，話すことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成すること
小学校 外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，外国語によるコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を育成すること
中学校 外国語	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す。

（文部科学省，2017a）

なお，上述の目標すべてに示されている外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方とは，「外国語で表現し伝え合うため，外国語やその背景ある文化を，社会や世界，他者との関わりに着目して捉え，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて，情報を整理しながら考えなどを形成し，再構築すること」（文部科学省，2017a:p.67）である。つまり，外国語教育において，単に4技能「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと」に必要な言語だけを習得するだけではなく，円滑なコミュニケーションをするために必要となる文化的・社会的コンテキストについても学び，異なる言語や文化的背景を持つ人とどのように関係を築いたらいいかを考えていく必要があると言うことが明白である。

このことからも，留学生との交流は，新学習指導要領で示された新たな目標である「外国語によるコミュニケーションにおける見方や考え方を働かせ，外国語活動による言語活動を通して，コミュニケーションを図る資質・能力を育成する」ことに直結する。なぜなら，附属小金井小学校と附属小金井中学校で行ってきた留学生との交流学習は，児童生徒が英語によるコミュニケーションを実践しながら，言語技能だけでなくコミュニケーションを図る上で必要となる資質・能力を学ぶ絶好の機会となっているからだ。これまで，附属小金井小学校と附属小金井中学校では，英語教育の改善と充実を図るために，附属学校研究等で相互の授業参観や指導方法や内容についての情報交換を行ってきたが，カリキュラムマネジメントについてまで踏み込んで議論するには至っていなかった。そこで，附属小金井小学校から附属小金井中学校へ例年70％～80％の児童が進学する実態を踏まえ，小中連携の一歩として，学習指導要領の改訂に伴い，本研究プロジェクトを立ち上げた。故に，外国語教育における留学生との交流という学習の場は，児童生徒にとって学ぶ価値が大きく，この交流学習を小中で連携させていくことは，児童生徒のさらなる学びの充実に向けて意義があるものと考えている。

以上述べてきた背景から，未来の地球・社会を生きていく児童生徒にとって，価値ある学びとなる英語教育の一方法を探っていくための一助となるような研究をめざす。なお，本研究では，持続可能な小中連携カリキュラムを作成するために，これまでの附属小金井小学校と附属小金井中学校での教育実践を基に，両校が実践してきている留学生との交流活動を柱として検討していく。留学生との交流は，小学生にとっても中学生にとっても，授業で学習してきた知識や技能と自分のそれまでの経験などの全てを活用して，外国語によるコミュニケーションを実践できる学習機会であるとともに，相互文化的能力を育成していくことのできる貴重な経験の場でもある。故に，留学生との交流での児童生徒の学びや経験が，より確かで充実したものになっていくように，小学校と中学校の交流活動を英語教育の視点から吟味検討し，連携カリキュラムを作成しその効果も検証していくことを目的とする。次章に，研究内容について示す。

２．研究の内容

本研究は，3年次計画で行う。全体的な研究内容の概要は，以下の通りである。

（1）英語教育における国際理解教育の変遷や小中連携に関する，先行研究および実践研究の情報収集

① 国内のこれまでの英語教育における小中連携に関する先行研究

② 国内の英語教育における小中連携の実践研究についての調査

（2）連携カリキュラムの検討および実践研究

① これまでの小学校と中学校の実践を整理し，成果と課題を検討する。

② 学習者の振り返りや感想およびその後のアンケートとインタビュー

③ 指導書の学習者への支援やフィードバック，その後の振り返り

④ ①②③を基に英語学習の系統性のあるカリキュラムへと変革していく。

⑤ ④を踏まえた留学生との交流の実践研究を，小学校・中学校で行う。

（3）小中連携によるカリキュラムの有効性を検証

① 実践での児童生徒の実態を記録した動画から，言語技能やコミュニケーション能力についての比較検証

② 児童生徒の主観的かつ質的評価と客観的テストによる教育的有効性の検証

ただし，新型コロナウィルス感染の影響に伴い，2020年3月より全国の学校が一斉休校になるなど予期せぬ事態となり，2020年度の研究内容は一部予定通り遂行できなかったため，臨機応変に対応した。

３．研究の計画

本年度は，3年計画の研究の1年目として，

（1）英語教育における国際理解教育の変遷や，小中連携に関する先行研究および実践研究の情報収集

（2）連携カリキュラムの検討および実践研究として，①これまでの小学校と中学校の留学生との交流の実践を整理し，成果と課題の検討

をすることにした。

次年度は，1年次の実践研究を基に，英語学習の系統性を図り児童生徒にとってよりよい学習環境となる留学生との交流のカリキュラムへと改変していく。また，実践における学習者と指導者の両視点から，自己評価・アンケート・インタビューをもとにその有効性を検証する。また，研究の経過および2年次での成果と課題を学内外で発表する。

最終年次は，前年度までの実践研究を基に，英語学習の系統性を図り，児童生徒にとってよりよい学習環境となる留学生との交流カリキュラムへと改変していき，留学生との交流実践研究を小学校および中学校で行う。また，小中英語教育の連携カリキュラムの有効性を検証する。さらに，学校で留学生との交流活動を経験した児童生徒が，附属中学校でも留学生との交流学習を行うことができた場合，小学校と中学校の児童生徒の学びの相違を比較する計画である。

４．先行文献研究

４．１．学校教育での「国際理解」教育

1989年（平成元年）に告示された学習指導要領の「外国語（英語）」の目標に「国際理解」という言葉が示されている。「中学校指導書外国語編」の外国語学習の目標に，「国際化の時代に生きていくため，国際性を身につけることが，外国語学習の最終目標」であるとして，「外国語学習は国際理解の基礎を培うもの」と明記されている。また，小学校教育では，1998年（平成10年）の「小学校学習指導要領」で「総合的な学習の時間」が誕生したのを受け，2000年からの2年間を移行期間とし，2002年からの全面実施によって，全国的に多くの自治体や学校で「国際理解」を一つの課題として学習してきた（中村・鈴木・巽・林・矢野，2020）。この「国際理解」の学習から「外国語活動」への導入が徐々に始まった。以前勤務していた横浜市立の公立小学校では，「国際理解」の学習として市が採用した英語で授業のできる外国人講師を各学校に計画的に配置し，英語で講師の国の文化について学ぶ時間が確保された。この当時から，「国際理解」と外国語（英語）教育が無関係ではないことが分かる。

この当時の国際理解教育は，1996年7月19日の中央教育審議会の答申（中教審答申）『21世紀を展望した我が国の教育の在り方』の中では，以下のように述べられていた。

「国際化が急速に進展する中で，絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに，国を越えて相互に理解し合うことは，ますます重要な課題となりつつある。国際化の進展は，人と人との相互理解・相互交流が基本となるものであり，その意味で，教育の果たす役割は，ますます重要なものとなると言わなければならない。（中略）このような国際化の状況に対応し，我々は特に次のような点に留意して，教育を進めていく必要があると考えた。」

(a) 広い視野を持ち，異文化を理解するとともに，これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること。

(b) 国際理解のためにも，日本人として，また，個人としての自己の確立を図ること。

(c) 国際社会において，相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から，外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

４．２．学習指導要領『小学校外国語教育』

小学校教育では，平成20年に改訂された学習指導要領において「外国語活動」が必修化され，平成23年度から高学年において外国語活動が導入された。目標は，「外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。」（文部科学省，2008:p.107）と述べられている。内容については，「外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図る内容」と「日本と外国の言語や文化について，体験的に理解を深めるための内容」が設けられている。このことから，英語を用いたコミュニケーション能力の素地作りを目標としながら，同時に異文化理解・国際理解が小学校英語教育において重要な部分を占めていることが理解できる。また，小学校外国語活動の導入と指導の充実による成果として，「児童の高い学習意欲，中学生の外国語教育に対する積極性の向上」（文部科学省，2017a:p.7& p.63）が挙げられている。その一方で，以下のような課題が挙げられている。一つは，小学校高学年の児童の発達段階に応じた体系的な学習の必要性と，もう一つは，小学校で行う音声を中心とした学習を，どのようにしたら中学校で行う英語の発音とつづりの関係の学習や文構造の学習へと円滑に接続させていくか，ということである。

平成29年告示の新学習指導要領では，中学年の外国語活動が導入され，高学年の外国語が教科となった。これに伴い，令和2年度より全国の小学校で外国語活動と外国語が全面実施となった。中学年の外国語活動では，聞くこと・話すことの音声を中心とした2技能が，高学年の外国語では音声2技能に加えて，読むこと・書くことの文字に関する2技能を含めた4技能を育成することとしている。また，外国語活動・外国語ともに学年ごとの目標ではなく，2学年を通した目標が示され，弾力的な指導ができるようになっている。さらに，今回の改訂では，単なる単語や形式表現を覚えて活動するのではなく，お互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う言語活動を通しての学びが強調された。これは，「児童生徒の学びの過程を通じて，知識・技能が，実際のコミュニケーションにおいて活用され，思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され，学習内容の理解が深まるなど，資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である」（文部科学省，2017:p.64）という趣旨に基づいていると考えられる。

異文化理解・国際理解に関しては，外国語活動・外国語の学習指導要領の目標に次のようにある。

【外国語活動】

・外国語を通して，言語や文化について体験的に理解を深め，日本語と外国語との音声の違い等に気づくとともに，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。（p.13）

・外国語を通して，言語やその背景にある文化に対する理解を深め，相手に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。（p.15）

【外国語】

・外国語の背景にある文化に対する理解を深め，他者に配慮しながら，主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。（p.72）

外国語活動では，英語だけでなく様々な言語に触れたり，外国だけでなく日本も含めた生活，習慣，行事や児童にとって身近な食生活や遊び，学校などを取り扱ったりする中で，児童が多様な言語や文化，多様な考え方が

あることに気づき理解を深めていくことを目指している。外国語では，中学年の外国語活動での「言語やその背景にある文化に対する理解を深める」という目標を踏まえ，学習対象となる外国語の背景にある文化に対する理解を深めることへとつながっていることがわかる。

さらに，外国語の具体的な題材として，「英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活，風俗習慣，物語，地理，歴史，伝統文化，自然などに関するものの中から，児童の発達段階や興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるもの」（p.134）としている。また，題材を選択する三つの観点が示されている。

（ア）多様な考え方に対する理解を深めさせ，公平な判断力を養い豊かな信条を育てることに役立つこと。

（イ）我が国の文化や，英語の背景にある文化に対する関心を高め，理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと。

（ウ）広い視野から国際理解を深め，国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに，国際協調の精神を養うことに役立つこと（p.134-135）

小学校の外国語活動・外国語で，異なる言語や文化について知り，それらに興味・関心を持ち，さらに探求したり，自文化との相違に気づいたり，自他の文化についての理解を深めたりすることで，多様な文化や価値が存在する現実社会で生き抜くために必要な資質・能力を育てていくことを目指していることを再確認できる。

（附属小金井小学校：中村　香）

４．３．新学習指導要領『中学校外国語教育』

令和3年度4月1日より完全実施される中学校の新学習指導要領（文部科学省，2017b）には，英語の学習における小学校との連携とその大切さについて触れられている。どのようなことが必要となっているのか，中学校の立場から検討したい。基本的なコミュニケーションについての課題を確認した後に，具体的な活動，結論についてまとめたい。簡潔に要点を述べる必要から，特に「話すこと［やりとり］」に焦点を当てる。

まず「外国語改訂の趣旨と要点」の項目の中で，今までの成果と課題を確認したい。成果として，「中学校においては，小学校における外国語活動の成果として英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され，「聞くこと」及び「話すこと」の活動を行うことに慣れているといった変容が生徒に見られること等も踏まえ，授業における教師の英語使用や生徒の英語による言語活動の割合などが改善されてきている。」（p.6）と述べられている。このことから，コミュニケーションの基本的な姿勢は整いつつあることがうかがえる。そして課題として，「習得した知識や経験を生かし，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある。」（p.6）と述べられ，「各学校段階の学びを接続させるとともに，外国語を使って何ができるようになるか，を明確にするという観点から，小学校の学びとの接続を意識しながら各言語の目標として英語の目標を設定した。」（p.6）と続けられている。以上のことから小学校での学びを把握しつつ，運用できる段階にまで伸ばすということが中学校での学習に求められている。

具体的な内容について，「話すこと［やりとり］」の目標イ「日常的な話題について，事実や自分の考え，気持ちなどを整理し，簡単な語句や文を用いて伝えたり，相手からの質問に答えたりすることができるようにする。」（p.23）について検討する。この目標は，小学校の「日常生活に関する身近で簡単な事柄について，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。」という目標と対応しているが，中学校で求められる学習について確認する。中学校段階では，思ったことをすぐに言う，という段階から場面や相手の発言に応じて，考えや意見を整理して述べたり，質問をしたりするという段階へと進むことが望ましいと思われる。具体的な活動としては，小学校の活動の延長であるチャットの活動からディスカッションやディベイトという活動へと進んでいく。そのために必要な能力は，短時間に相手の言うことを理解して，自分

の意見や考え，質問を相手の分かりやすい言葉に整理して伝えることである。また受け手は相手の話を理解して，それに返答したり，意見をつけ加えたりすることが求められる。次に，より国際理解との関係の深い言語活動及び言語の働きに関する事項の「話すこと［やりとり］」のウ「社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき，読み取ったことや感じたこと，考えたことなどを伝えた上で，相手からの質問に対して適切に応答したり自ら質問し返したりする活動」（p.63）について検討する。そこで述べられている，「生徒が自分の経験などと結び付けたりしながら，言語活動を行うことが必要である。例えば，社会で起こっている事象について，どのような考えが望ましいのか，自分であればどのような行動をとるか，またその理由を説明したり，逆に相手により詳しい説明を求めたりすることなどが考えられる。」（p.63）を実践するためには，小学校との連携をスムーズにして，現段階での力をしっかりと把握した上で，1年生から段階的，計画的に活動や練習を計画し，世界に対しての関心を高めさせることが必要である。

取り扱う語数については現行の「1200語程度」から「1600 ～ 1800語程度」に増加したり，文法事項については「現在完了進行形」や「仮定法」などが増えたりするなど，より豊かな言語活動をするために，総学習時間数は変わらないにもかかわらず，学ぶ内容は大幅に増加している。中学校3年生での学習内容をいくつかの教科書で確認すると，ディスカッションやディベイトという全ての技能を統合した高度な学習活動を，社会問題やよりアカデミックな話題をテーマに行うことが求められている。中学校に設定された目標について学習内容を理解するだけでなく実際に運用できるようにするためには，全ての項目において小学校段階での学習を把握した上で，各学習者の現状を踏まえて，積み上げていく必要がある。語彙の学習において，「学習を繰り返し何度もこれらの語彙に触れるうちに徐々に定着が深まり，受容から発信への転換が促進されるように指導していく必要がある。」（p.34）と述べられているように，学習の重複ではなく，望ましい形での反復学習を行うことが求められている。

（附属小金井中学校：荻原　真也）

４．４．英語教育における小中連携

英語教育に限らず，どの教科領域でも小学校教育と中学校教育との連携は必要であり，これまでも小学校と中学校との様々なギャップを埋める努力を行政や現場は行ってきている。例えば，高学年で教科担任制の導入や，中学校教員による出前授業などを行っている自治体や中学校区がある。ここでは，英語教育における小中連携の現状を，文部科学省が調査した「『平成30年度　中学校等に英語教育実施状況調査』の結果」（文部科学省，2020）から見ていく。

この調査の「英語教育における小中連携の状況」に関して，調査対象9374校のうち連携を実施した学校は7553校（約81％）であった。これは，26年度の同じ調査で約76％から大きく上昇している。一方，どのような連携をしているかについては，①小・中の学校相互の授業参観や年間指導計画の交換など，お互いの取り組みの情報交換が約73％，②指導方法などの検討会や研究授業後の研究協議会等を含めた交流の実施が約56％，③小・中で連携したカリキュラムの作成が約13％という結果だった。情報交換が7割以上の学校が実施しし，研究授業や協議会，指導法に関する交流は6割弱と半数以上の学校が実施しているのに対し，連携カリキュラムの実施に至っては1割強と激減している。この要因として，連携カリキュラム作りは，情報交換や授業等の交流よりも時間や専門知識が必要な上に教員間での意識の相違や業務の忙しさなどにより容易に実施することができないことがあげられる（髙野・加藤，2014; 田中，2015）。

そこで次に，本研究で取り組む小中連携の段階や留意点について，文献及びこれまでの実践事例や実践研究から検討していく。まず，小中連携の段階としては，前述の文部科学省による調査で用いられている①情報交換，②指導法・授業内容の交流，③小・中で連携したカリキュラムの作成が一般的に広く認識されているものとして（萬谷・直山・卯城・石塚・中村・中村，2011），本研究でも踏襲していくこととする。各段階における具体的な

内容は，以下の表に示す。

情報交換	・小学校外国語活動での取り組み，中学校英語科での取り組みを，小中の担当教員が相互に知り合うものとして，授業参観や同じ中学校区で行われる小中合同の研修会，年間指導計画の交換等
交流	・情報交換を踏まえて，少なくとも小学生，中学生，小学校教員，中学校英語担当教員の4者が携わり，お互いの学校で合同・相互授業を行うことや，授業研究会や研究協議会，指導方法の検討会の実施等
連携 カリキュラム	・小学校外国語と中学校外国語との連携したカリキュラムを作成する。「目標の一貫性」,「指導法の一貫性」,「学習内容の継続性」をカリキュラムの三要素として系統性を図る。

（「小中連携Ｑ＆Ａと実践　小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント」p.6－7をもとに中村が作成）

『小中連携Ｑ＆Ａと実践』（萬谷　他，2011）では，9つの実践事例が掲載されている。市政が推進する中で連携カリキュラム作りから取り組んだ事例もあれば，併設している小規模の中学校と小学校が連携してお互いの授業参観から取り組んだ事例もあり，連携の方法も様々である。どれも児童生徒のよりよい学びとなるようにと，小中連携を通して，小学校教員も中学校教員も互いを尊重し合い理解を深め尽力したことで，成果とともに課題が明らかになっていることが，小中連携を行う大きな意義だといえる。

次に，近年の小中連携に関する実践研究を見ていく。中学校教諭による実践研究として，山形県内の公立小中学校での，「指導者の連携」と「学習の連携」の視点から，共同による連携を試みた事例がある（田中，2015）。まず，小学校と中学校の教員に質問紙による小中連携に関する意識調査を行い，実態を把握したうえで，小学校英語活動へ共通の目的意識をもった。次に，学習者の意識調査を行い，入学前に中学校英語の授業に期待をする生徒が全体（116名）の67.3％であると同時に，48.3％の生徒が不安を抱いているという実態が明らかになった。また，英語学習を「（とても）楽しいと思う」かについては，中学2年生6月に91.1％だったのが1月には81.2％と約10ポイントも下がっている。この原因として，中学校英語に対する「難しい活動」について，「書くこと：61.6％⇒55.4％」を挙げている生徒が多かったことと，「聞くこと」のポイントが約30％から約50％に増えていることを挙げている。これらを踏まえ，中学校教員である中田が，小学校の教員と共同で実践研究に取り組み，「児童の発達段階に合った活動」「相手意識が高まる活動」「指導法の適切さ」について検討した。この実践研究から，田中（2015）は，円滑な小中連携には，外国語教育に対する意識や価値観も含め，小学校と中学校の教員がお互いに情報交換をする必要性と，教員個人においても目標や指導の違いといった小中学校間の違いを理解した上で，実践を試みることで，児童生徒の不安感を軽減し，肯定的な意欲の持続にも繋がると結論づけた。

5年に及ぶ小中連携の事例として，「豊かな英語力を育成する小中一貫の外国語教育」をめざした実践研究がある（喜多・福井，2017）。この実践では，１）小中学校教員が協力した小中一貫の9年間のカリキュラム作成，２）小学校での外国語科での学びを中学校英語科へとつなげる中学校入門時のスタートカリキュラムの開発，３）中学校入門時における指導の工夫，４）交流活動や作品を通しての小中の連携を行った。5年間の研究の成果として，１）小学校での帯活動による文字指導やフォニックスカルタや音読みの足し算などが，中学校での文字学習への抵抗や苦手意識の軽減に効果があったこと，２）小学校でのグループ活動やペア活動などインタラクション活動を中学校でも継続したことが，生徒の英語学習への不安を軽減し，学習意欲を高めたこと，３）スタートカリキュラムで，小学校で学んだ表現を繰り返し活用させることにより，生徒が自信をもって表現を使えるようになる手応えがあったこと，が挙げられている。このように，具体的な連携の方法を計画的に，また段階を踏んで行う中で，その成果を示すことで，小中連携が意義あるものになる。

別の興味深い事例は，小中連携リユニットを活用した実践研究である（浦田・柏木・中田・井出，2014）。この研究では，小学校外国語活動で慣れ親しんだ「ひとかたまりの表現」である「助動詞 can と動詞フレーズ」を，中学校外国語活動での文構造，文法法則などの理解に繋ぐことをねらいとし，そのための効果的な指導方法を用いて行う指導過程について実践しその効果を検討している。小学校の実践では，児童の外国語活動での学びの特性（学びに対する意欲と言語理解）を具体的に解明し，中学校の実践では，小学校での学びを生かし，１）

教材（絵カード）の共有，２）小学校での既習表現の活用，３）小学校での活動を活用，を行った際の生徒の学びを調査した。この実践研究から，小中連携は，小学校教員が，今後の英語学習を見据えた指導を可能にしたり，中学校教員が，生徒の小学校で蓄積してきた音声による学びの視覚化を可能にしたりするなど，「指導の連携」や「学習の連携」に有効なものとなっている。

これらの実践事例から，本小金井地区での実態に合った持続可能な連携を進める上での留意点をあげる。

・できることから始める。例えば，お互いの授業を参観し，感想を伝え合う。
・お互いの感想を記録に残し，指導方法，児童・生徒の学ぶ姿，授業作りなど観点ごとに整理する。
・お互いの学校文化を尊重し，認め合い，理解し合う姿勢をもつ。
・連携に向けての課題や，目指す方向性を明確にする。
・小学校・中学校で扱っている言語表現をお互いに把握する。（系統表の作成や一覧表の作成）
・中学校教員による小学校児童への英語の授業や，小学生と中学生との交流授業を協働して行う。
・留学生との交流学習の視点から，小中連携のカリキュラムを作る。
・児童・生徒の実態や変容をみとり，作成したカリキュラムの有効性を検証する。（アンケート，振り返り，学ぶ姿）
・成果と新たな課題を明らかにしながら，継続的に取り組んでいく。

５．研究の実際

５．１．小学校のこれまでの留学生との交流活動の実践（実践者：附属小金井小学校・中村香，対象：６年生）

５．１．１．小学校英語での交流活動の目的

本校英語部では，教師や仲間と相互にかかわり，外国語としての英語を，母語やこれまでの言語経験を生かしながらコミュニケーションをするための「ことば」として獲得し，獲得した「ことば」を実際に活用していくことを大切にしている。英語でコミュニケーションをする力を育むためには，子供が出合った「ことば」をもとに，実際のコミュニケーションで「ことば」を活用することが必要不可欠である。「ことば」を活用する学習活動を通して，思考・判断・表現することを繰り返していく中で，子供は「ことば」を獲得することができ，また同時にコミュニケーションに必要な「見方・考え方」を培うことができる。そうすることで，英語の「ことば」のおもしろさや，英語が世界に繋がっていく「手段」として重要なものであることを，子供たち一人ひとりが心と体で感じることができるからである。そうした学びを積み重ねることで，子供たちの中にグローバル社会を生き抜くための「資質・能力」が培われていくと考える。

そこで，高学年の英語活動で子供が主体的に学ぶ授業づくりをめざし，「実際に英語でコミュニケーションしたい」という子供のアンケート結果から，留学生との交流を計画した。留学生との交流に向けて，子供が必要感をもって意欲的に活動に臨み，「ことば」を追求したり，進んで英語で表現したりする授業を学習環境としてデザインすることをテーマにしてきた。その中で，2018年度から6年生の英語活動学習の一環として，留学生との交流活動を行っている。2018年度と2019年度は，文部科学省が作成した英語活動副教材「We Can! 2」の”Unit2 Welcome to Japan!!”を主教材にし，単元『日本の文化を英語で紹介しよう～留学生との交流活動を通して～』として行った。ここでは，2年間の実践を簡潔にまとめる。

５．１．２．単元目標（２年間共通）

教科化に向けた移行期間中ということで，教科化を見据えた目標を設定した。「知識・理解」として，日本の食べ物や遊び，行事など，日本の文化について，英語で聞いたり言ったりすることができる。「思考力・判断力・表現力」として，１）日本の食べ物や遊び，行事など，自分が好きな日本文化について，例や辞書を参考に

しながら，英語で表現することができる，２）日本の食べ物や遊び，行事など，自分が好きな日本文化について，留学生に伝わるように工夫してプレゼンテーションすることができる。「主体的に学習に取り組む態度」として，相手に配慮して，日本の文化が伝わるように，友達やグループで協力しながら自分たちの発表内容を考え，練習し，発表しようとしている。

５．１．３．学習指導計画

	2018年度（全18時間）○内は授業数		2019年度（全12時間）	
1次	留学生との交流にむけた目標とグループ決め	①	留学生との交流にむけた目標とグループ決め	①
2次	プレゼンテーションのモデルとなる 英語表現や型に慣れ親しむ活動	③	プレゼンテーションの内容決め＆ 英語のプレゼンテーションづくり	④
3次	グループのプレゼンテーションの内容決め	①	英語のプレゼンテーションの練習	④
4次	英語のプレゼンテーションづくり	④	留学生との交流と振り返り	③
5次	英語のプレゼンテーションの練習	⑥		
6次	留学生との交流と振り返り	③		

※2019年度は2018年度の実践の反省から，前年度の学習指導計画の2次～４次をそれぞれのグループのプレゼンテーションづくりに特化するように学習計画を変更した。

５．１．４．授業の実際

交流当日に向けた事前準備・授業，当日の交流活動，交流後の振り返りについて述べる。

1）交流学習計画の作成

まず，以前本校の事務をされ，現在は国際交流課に配属されている職員との間で，交流の概要やねらいおとび大まかな日程について打ち合わせを行った。その後，大まかな交流学習計画，１）学校給食を一緒に食べること，２）留学生に自己紹介と自国の文化紹介を英語でしてもらうこと，３）6年生がグループごとに日本の文化紹介をクイズ形式でプレゼンテーションすること（事前の授業で準備），４）紹介したい日本の遊び（折り紙，紙相撲，コマ，けん玉，福笑い，双六，書道，など）をグループで紹介し留学生と一緒に遊ぶこと，５）交流後に振り返りを行うこと，を作成した。

2）実行委員会の立ち上げ

留学生との交流学習を，教師主導ではなくより児童が主体的に取り組めるように，各学級男女1名ずつの実行委員を決め，交流学習の概要や目的を伝えた。実行委員は，学級の話し合いや各班の準備進行の把握や調整，当日の司会進行を行った。

3）交流に向けた授業

次	2018年度 ○主な学習活動・児童の主な反応や振り返り	2019年度 ○主な学習活動・児童の主な振り返りや反応
1	**○留学生との交流の目標とグループ決め** ・留学生との交流が楽しみ。 ・留学生との交流にむけて準備をがんばる。 ・もっと英語が話せるようになりたい。 ・日本の良さを伝えたい。	**○留学生との交流の目標とグループ決め** ・留学生との交流が楽しみ ・留学生に英語が伝わるか不安 ・日本文化のよいところを伝えたい ・スラスラ話せるように練習する。 ・日本の食べ物について留学生に紹介したい。
2	**○プレゼンテーションのモデルとなる英語表現や型に慣れ親しむ活動** ・クイズを用いると留学生も興味をもってくれそう。 ・クイズにも，○×や選択問題，3ヒントクイズなど色々あったので，交流でも上手に活用していきたい。	**○プレゼンテーションの内容決め＆英語のプレゼンテーションづくり　（昨年の児童の感想やアドバイスを紹介した。）（昨年の例を示し，簡潔にモデルとなる英語表現や型を紹介）** ・内容を決めるのに，すごく時間がかかってしまった。

2	・プレゼンテーションで，写真や実物を見せたり，実演したりすると留学生にも分かりやすいと思った。 ・クイズを英語で作るのは，とても難しかった。 ・習った英語表現や型を使って，プレゼンテーションを作っていきたい。	・クイズにすれば，留学生も楽しみながら日本のことを分かってもらえると思った。 ・習った英語表現や型を使ってプレゼンテーションを作っていきたい。 ・日本語を英語にするのがすごく難しかった。 ・紹介する日本文化について，家でも調べてこようと思った。 ・プレゼンテーションに必要な写真を準備する。
3	**○グループプレゼンテーションの内容決め** ・紹介したい日本文化がメンバーそれぞれ違い，内容が決まらない。 ・留学生に紹介するために，もっと調べる時間が欲しい。 ・調べてみて，自分の知らない日本のことが分かった。 ・次の時間までに，内容をきめる。 ・改めて，留学生に日本の良さを伝えたいと思った。	**○できたところから英語のプレゼンテーション練習** （グループ練習） ・友達が英語の発音の仕方を教えてくれたので，少し言えるようになった。もっと練習してスラスラ言えるようにしたい。 ・本番でスムーズに言えるように，家でも練習する。 （他のグループと見せ合う練習） ・声が小さくて聞こえないと言われたので，もっと大きな声で言う。 ・資料も上手く見せられるように，練習する。 ・ジェスチャーがあると聞きやすいので，自分もジェスチャーを使う。 ・もっと分かりやすい資料に変える。
4	**○英語のプレゼンテーションづくり** ・自分の伝えたい日本文化を英語にするのがすごく難しい。大変。 ・全然進まなかった。日本語を英語にできるか不安。 ・家でも調べて，英語のプレゼンテーションを完成させたい。 ・日本文化を自分の考えた英語で留学生に伝わるか心配。 ・クイズの部分はできたので，次は練習をがんばりたい。 ・プレゼンテーションに必要な写真を用意する。	
5	**○英語のプレゼンテーションの練習** ・紙を見ないでも英語が言えるように練習したい。 ・まだまだカタカナ読みなので，留学生に伝わるようにしたい。 ・まだ用意しなければいけないものがあることが分かったので次の時間までに用意する。 ・i-pad で英語の発音が分かったので，練習して言えるようにする。 ・家でも練習して，本番はちゃんと言えるようにしたい。 （他のグループと見せ合って練習） ・もっと分かりやすい資料を準備しないといけない。 ・もっとゆっくり大きな声で話さないと，相手に伝わらない。 ・紙を見て話すのではなく，相手を見ていえるように練習する。	
	・○○くんのグループは，スムーズにプレゼンテーションができていたので，自分たちも友達と協力して時間内にできるようにしたい。 ・ジェスチャーをすることで，より相手に伝わることが分かった。 ・聴く側が，うなずいたり反応してくれると嬉しいので，自分が聞くときにもうなずいたり，クイズの答えを考えて反応したりする。	

4）交流当日

2018年は，12月5日，12日，18日に1学級ごとに交流を行った。計3学級の6年生（2人欠席し101人）と延べ18人の留学生が交流に参加した。留学生の出身国は，中国（5人），韓国（3人），タイ（2人），モンゴル（1人），ベトナム（1人），アルゼンチン（1人），スウェーデン（1人），フランス（1人2回参加），ナイジェリア（2人）であった。留学生の参加はボランティアだったので，学級によっては，韓国人が3人，中国人が3人となることもあったが，出身の異なる4カ国の留学生と交流した。

一方，2019年は，12月10日に1学級，18日に2学級が交流した。計3学級の6年生（2人欠席し103人）と延べ18人の留学生が交流に参加した。留学生の出身国は，中国（3人），香港（2人），台湾（1人），韓国（3人），タイ（1人），ベトナム（1人），アメリカ（3人），フランス（2人），ウズベキスタン（1人），オーストラリア（1人）であった。この年は，10日の交流へ参加した留学生はボランティアであったが，18日の交流は，ISEP（International Student Education Program: 留学生教育プログラム）の学生で，プログラム内の授業 Global Japan Studies の一環として参加した学生で，さらに日本人学生5人が見学参加した。また，18日は，授業者の中村がインフルエンザで休んだため，全ての交流を実行委員が中心となって行ったため，交流の様子は動画記録を視聴したものである。

2018年度 児童の活動の様子	2019年度 児童の活動の様子
○留学生との交流会 ・緊張しながらも，留学生の自己・自国文化紹介を熱心に聞いていた。普段のリスニング活動以上に，聞きたい・分かりたいという思いをもって聞いている児童が多くいたと思う。英語が全て聴き取れなくても，視覚情報を手がかりに相手の言っていることを理解しようとしていた。しかし，分からない英語が続くと，後ろにいる英語担当教員や学級担任の方を振り返り，「教えて」という表情をしていた。 ・グループごとのプレゼン発表では，緊張しながらも練習の成果を発揮していた。留学生が，積極的にクイズに答えてくれて盛り上がっていた。 ・日本の文化体験（コマ，習字，福笑い，折り紙，けん玉等）では，ジェスチャーや片言の英語，または日本語も交えて，交流していた。個々での英語は，授業では準備していないので，即興的な英語力が試されたが，遊び的な要素も多く，留学生も児童も笑顔で交流し合っているのが印象的であった。英語力を実践する以上に，交流体験での五感をフル活用した学びがあるように感じた。 **○振り返り** ・留学生との交流で，他の国の文化，日本以外の文化を知ることができたことが良かった。 ・プレゼンテーションでは，緊張したが留学生が反応してくれたことが嬉しかった。 ・留学生に自分の英語が伝わって嬉しかった。 ・練習をがんばって，発表できて良かった。	**○留学生との交流会** ・留学生の自己・自国文化紹介では，ほぼ昨年度と同様な児童の反応であったが，担当教員がいないところは，児童間で聞き合ったり教え合ったりする姿も見られた。 ・プレゼンテーションの準備と練習時間が昨年よりも少なかった分，グループによって完成度に差が出たように感じる。しかし，昨年度はプレゼンテーションづくりと練習のところで，児童の学びがダラダラと間延びてしまったのに比べ，今年度は短期集中して取り組めていた。 ・積極的に参加できた学級は，英語の授業以外でも学級で担任の先生が時間を取り準備練習をしたことで，全グループがプレゼンテーションをしっかりと行えるレベルに達していた。しかし，英語力の個人差があり，英語ができる子供がグループにいるとその子に頼ってしまうところも見られた。 ・昨年度同様，留学生との日本の遊びで交流した時間をとても楽しんでいた。 **○振り返り** ・活動に対して前向きに取り組むことが出来ない児童が各学級に散見できたが，留学生が熱心に交流活動している姿勢に，驚いたという児童がいた。 ・日本語が当初思っていたよりも通じたので，文化体験交流ではとても楽しかった。 ・留学生が喜んでくれて，嬉しかった。良かった。 ・また，留学生との交流をしたい。

５．１．５．２年間の実践を振り返って

この実践を通して，自分が留学生に伝えたい日本文化について英語で表現するために，児童が主体的に学ぶ姿が見られた。これは，テキストを網羅することを目標とした場合，教師主導のパターン化した授業になってしまうこともあり，中には英語の授業への参加意欲が低下してしまう児童も見られた時とは，明らかに異なる。交流に向けた学習では，児童が自ら調べて体験することが求められる。実際に，授業の時間以外で自主的に準備や練習をしている児童の姿を見ることが多くあった。これは，これまでの英語活動ではなかなか見られなかった姿である。これらから，交流に向けた一連の学習が，児童が主体的に参加する学習環境となったと考えられる。

交流後の児童の感想には，表現は様々であるが，実際に英語を活用して通じた喜びや，準備や練習をしてきた英語を留学生に伝えられた達成感，留学生の発する英語から異文化について学べたうれしさ，英語だけでなくジェスチャーや表情，イラストや実演等の非言語コミュニケーションで意思の疎通ができた実感や楽しさが書かれていた。特に，英語に苦手意識をもつ児童にとって，英語でコミュニケーションをする楽しさや英語でコミュニケーションをしてみたいと思える機会となっていた。このような交流経験は，英語の言語能力の学習以上に英語学習への前向きな態度を培うことができることから，留学生との交流活動を行う大きな価値や意義を改めて感じた。

課題としては，児童の言語的な学びを向上していくための授業作りである。両年の実践ともに，児童の言いたい英語表現と児童の使える英語表現のギャップを埋める手立ての必要性を強く感じた。教師が，モデルとなる英語表現を提示しても，伝えたいことを日本語で考えてから英語にしようとすると，どうしても既習の言語材料では無理が生じてしまう。そこで，複雑で難しい語彙を用いた日本語の表現を単純で簡単な日本語に直して英語にすることを助言したり，知っている英単語からヒントにつなげていく方法を提示したりした。今後，児童がプレゼンテーションで実際に用いた英語表現を整理し，英語で日本文化を紹介するための言語材料を蓄積していくことで，さらなる手立てへとつなげていきたい。

（附属小金井小学校：中村　香）

５．２．中学校のこれまでの留学生との交流活動の実践（実践者：附属小金井中学校・青柳有季，対象：中学２年生）

５．２．１．中学校英語科の本質と2019年度「学校紹介」の目的について

本校英語科では，「英語学習を通して，自己・自国文化と，他者・多文化を理解しようとし，目的・場面・状況に応じて，①正確に情報の授受をし，②自分の考えや気持ちを積極的に伝えようとする生徒の育成を図ること」を教科の本質としている。

2015年度から2017年度までの3年間，授業者は「教科の本質」を重視した「深い学び」のあり方について，1年生から3年生までのそれぞれの学年の「学校紹介」をテーマに追究してきた。「深い学び」とは，生徒同士の相互作用を通した「目指すべき学びの姿やその過程」であり，英語科においては「習得した知識や4技能，思考力・判断力・表現力等を活用し，その過程を楽しみながら教科の本質に迫る学び」のことである。つまり，教科の本質は「過程」であり，テーマに対して探究する方法でもあると考えた。2018年度の2年生における「学校紹介」では，前年度までの「深い学び」を念頭に置き，生徒同士の相互作用により個々の生徒が「より良い表現」を見出していくための「表現活動の工夫」について追究した。2019年度の2年生における「学校紹介」では，「現実社会との親和性を深めること」を目的とし，生徒が言語活動を行うテーマ・場面を“authentic（真正なもの）”にすることにより，学習した英語を社会により結びついた本物のコミュニケーション，すなわち「拡張する学び」へとつなげていくことを追究した。「拡張する学び」とは，生徒が「自分の知識，技能，思考，判断，表現」を変容して，他者とコミュニケーションを図り，自分のメッセージを伝えようとする姿勢のことである。そのために授業者は，生徒が学んできた既習事項を統合的に活用し，自分の言葉で「学校生活」を伝えられるような活動を試みてきた。このように，授業者が5年間実践してきた「学校紹介」のゴールは，それぞれの年の12月に

「留学生などの外国人の方々に，自分たちの『学校生活』について伝えること」と，それに関する「即興的なやりとり」である。新学習指導要領に，「やりとり」という表現活動が加わるため，授業者は，生徒が自分の伝えたいことを適切なタイミング，かつ自分の言葉で表現できるような授業を心掛けていきたいと，常日頃から考えている。

５．２．２．生徒とつながりの深い教材の工夫

「学校紹介」本番に向けて，生徒たちは日常的な話題についてトピックを決め，それに関する事実や自分の考え・気持ちなどを整理し，既習事項を運用した会話文をグループで作成して発表したり，ゲストからの質問に即興で答えたりできるような練習を授業で行ってきた。その過程において，生徒たちが英語使用の達成感や挫折感を実体験し，一人ひとりが「より良い表現」を追究していくために，次の3つの活動を重点的に行った。

1）生徒が「使いたい表現」を導入した活動

例）「言いたくても言えなかった表現」の紹介や，比較級・最上級・同等比較級の文法事項の先取り

2）「生徒が選んだトピック」に関する ALT・JTE とのグループ単位による会話と Q & A

3）「生徒が選出・撮影した写真や動画」を会話文に取り込んだ Show & Tell の活動

例）グループ毎の「トピック」に基づいて作成した会話文にふさわしい写真・動画の活用

＜使用した写真・動画＞・1年次11月「『北総常南』修学旅行」写真　・1年次1月「書初め」写真・実演

・1年次3月「合唱祭」動画・実演　・2年次5月「『秩父長瀞』修学旅行」写真・動画

・2年次10月「スポーツ・フェスティバル」写真・動画　・2年次10月「学芸発表会」写真・動画

・2年次「週番活動」写真・動画　・2年次「『社会』の授業」実演　・2年次「『柔道』の授業」写真・動画

・校内に掲示されている3年次「卒業制作」写真

５．２．３．望ましい学びのプロセスとは

1）学習意欲の促進

ユーリア・エンゲストローム（2010）は，「探究的学習」の4つの条件の一つに「正当な学習の動機付け」を挙げている。そこで，それを参考にして，2019年度も次の3点を意識した「学校紹介」の授業づくりを心掛けてきた。

① 「できた」，「理解してもらえた」ということによる肯定的体験

生徒に，「できた」，「理解してもらえた」という達成感を得させるためには，明確かつ大きな「ゴール」とそれに向けた「ステップ」を綿密に用意していきたい。そこで，「学校紹介」の本番前に，1分間の「グループ中間発表」を設けた。そこでは，仲間から出た質問に即興で応答したり，仲間からプラスのコメント・アドバイスをもらったりすることにより，生徒は「英語が通じた」，「ほめてもらえた」という達成感を味わえ，それが今後の意欲にも結びつくのではないかと考えた。

② 通常の授業とは異なる外国人・外国文化との接触体験

外国人・外国文化との直接的な接触体験も，第二言語習得研究の「統合的動機付け」と同種類のもので，生徒の学習意欲を促進すると考えられている。そこで，生徒が ALT と「学校生活」をトピックに会話を継続する機会を多く設けた。これにより，生徒たちは日米の文化の相違に気づいたり，「日本文化」をあらためて見直したりすることができていた。

③ 教室内での不安感の払拭

不安のない雰囲気の中で表現の喜びや思考の深化を実感してほしいと願い，日常的にペア・ワークやグループ・ワークにおいて互いに協力したり，間違いを指摘し合ったり，発表活動を通して「より良い表現」に気づい

たり，応援し合ったりするという場面を生徒に何度も体験させてきた。

2）学習プロセスの6つのステップ

ユーリア・エンゲストローム（2010）の「学習プロセスの6つのステップ」を参考に，2019年度の「学校紹介」の授業では，下記のステップを試みた。

授業時数（時期）	ステップ	「学校紹介」授業における生徒の学習内容
第1時～第2時 （10月）	Motivation （動機づけ） Orientation （方向づけ）	・12月に「学校紹介」を東京学芸大学の留学生などの外国人の方々を対象に行うことを知る。 ・アメリカのミドルスクールの「『学校紹介』ビデオ」，日本とアメリカの「『中学生の一日』ビデオ」，アメリカで放映された「日本の児童の掃除風景のビデオ」を見て，両国の学校生活の違いに気づく。 ・昨年の2年生の「『学校紹介』ビデオ」を見て，発表の仕方や表現形式を理解する。
第3時～第8時 （10月～11月）	Internalization （内化） Externalization （外化）	・自分が紹介したい「学校紹介」のトピックとその理由を考える。 ・4人1グループになり，それぞれが紹介したい「学校紹介」の「トピック」についてプレゼンテーションをし，グループの「トピック」を決定する。 ・グループの「トピック」について，伝えたいメッセージやキーワードを決定してからダイアログを作成する。ダイアログ作成の際には，「使える表現集」を参考にし，「言いたくても言えない表現」については質問し，該当の用紙に記述して提出する。 ・ALT との会話を通して日本とアメリカの中学生の「生活・行事・考え方」の違いに気づく。 ・グループの「トピック」に関して，資料（写真・動画）を選んだり，撮影したり，フィードバックされた文章を読みながら，「1分間発表」の準備をする。 ・ALT や JTE からグループの「トピック」に関して質問を受けたり，文章やその発音に関してアドバイスをもらいながら，「1分間発表」の準備をする。
第9時～第10時 （11月）	Critique （批評） Control （統制）	・9グループによる「学校紹介1分間発表」を行い，その後は他のグループとの質疑応答を行う。 ・「1分間発表」に関するフィードバックを授業者から受け，「良かった点・改善すべき点」を記載したコメント用紙を基に，本番に向けて練習をする。 ・「1分間発表」後に，他のグループからのフィードバックや，「使える表現集」を参考にして，再度自分のグループのダイアログに対して「より良い表現」を目指して修正や加筆を行い，発表の仕方にさらなる工夫を凝らしていく。
第11時 （12月）	Critique （批評）	・9グループによる「学校紹介本番」を行う。 ・留学生の方からの質問に即興で答えたり，その場で感想をいただいたりする。
第12時 （12月）	Control （統制）	・留学生の方からのコメント用紙を読み，「学校紹介」アンケートで授業を振り返る。 ・他のクラスの発表を基にした「使える表現集」の問題を解くことで，様々なトピックに関する他のクラスの有効表現を新たに学ぶ。

5．2．4．「学校紹介」の実際と考察

2019年度の生徒たちが紹介したグループごとのトピックは下記の通りである。

Group Topics of “Our School Life 2019” Dec 6th

	Class A（8:40 ～ 9:30）	Class B（9:40 ～ 10:30）	Class C（10:40 ～ 11:30）	Class D（11:40 ～ 12:30）
Group 1	Our First Grade School Trip	Our Sports Festival	Our Sports Festival	Our Sports Festival
Group 2	Our Class Culture	Our School Festival	Unique Teachers of Our School	Our School Festival
Group 3	Weekly Duties	Our School Festival	Our Choir Festival	Ultimate
Group 4	Our Sports Festival	Our School Trip	Our School Trips	Club Activities
Group 5	Our Sports Festival	Our School Trip	Our School Festival	Our School Festival
Group 6	Grasshoppers	Our School Festival	Kakizome（Japanese Traditional First Writing of the Year）	Bento（Lunch Boxes）
Group 7	Club Activities	Our Sports Festival	Club Activities	Our Sports Festival
Group 8	Lunchtime	Our Sports Festival	Our School Trip	Graduation Sculpture
Group 9	BUDO-JYO（The Martial Arts hall）	Our School Festival	Our Sports Festival	Studying Before the School Trip

発表当日は，学芸大学の留学生の方々や大学教員，そして英語教員をしているネイティブスピーカーの方々が参観してくださり，発表後は生徒たちとの質疑応答に参加してくださった。その一例を紹介する。

例）C組6班「書初め」・・・「書初め」を知らない留学生に，3人の生徒がその意義や具体的な方法を教えるという内容

4人の生徒たちが書道セットを持って登場。黒板に生徒たち自身の好きな言葉である「平和」と「明るい未来」という2枚の書写見本を貼る。「書初め」が新年最初の登校日に行われ，筆・半紙・墨を使用することや，新年の抱負を書いたりすることなどを会話で説明した後，“Let's do Kakizome!”と言って生徒たちは「書初め」を実践する。それぞれが好きな言葉，「愛」，「奉仕」，「自由」，「貯金」を書き，その言葉の意味や，“I want to save 15.000 yen next year!”等，それに伴った新年の抱負を説明する。留学生の方からの「年間に何回，書道をするのか」という質問には，「5回ほどです」，「授業ではそれぞれが異なる漢字を書くのか」という質問には，「実際の授業では，全員が同じ漢字を書きます」と生徒は答えることができていた。

＜Katie さんからのコメント＞I learned so much from your presentation about Kakizome! You taught a lot about Kakizome's tradition and the meaning of Kakizome. Each member spoke clearly and made good eye contact with the audience, so it was easy to understand. There is no similar tradition in America, so it was very interesting. Seeing you do Kakizome during your presentation was great! I had never seen it before, and you all wrote beautifully.

5年間の「学校紹介」の授業を通して，とくに分かったことは2つある。まず，「どの学年においても生徒の表現方法は多種多様であり，その表現が外国人の方に伝わったということが，生徒の『表現することへのさらなる意欲・自信』を生み出していくということ」である。次に，「学校紹介」発表後の質疑応答により，「『日本の事をあまり知らない外国人の方は，自分たちにとっては当たり前である日常習慣や日本文化に興味を持つのだ』ということを生徒たちは知り，彼らはより一層，異文化・自国の文化に関心を持つようになるということ」である。このことから，「学校紹介」の授業では，授業者による3点＜内容面・言語面・非言語面＞の生徒へのフィードバックを大切にしながら，生徒が「より良い表現」を追究できるような「真正の学び」の場面を，今後も設定していきたいと思う。

「書初め」の場面を紹介した生徒たちの様子

ネイティブスピーカーの方々との質疑応答の様子

（附属小金井中学校：青柳　有季）

５．３．小中連携カリキュラムに向けての検討

小学校教員と中学校教員がお互いの授業を参観したことや，お互いの留学生との交流活動の実践報告，そしてこれまでの児童生徒の実態について，感想をはじめ，小中連携の方向性を話し合った。その中で上がった事柄は，以下である。

【現時点での小学校英語活動の成果と課題】

・小学校英語活動の成果：音声に慣れ親しんでいる。英語を発することに抵抗がない。ALT との会話を臆しない。

・小学校英語活動の課題：アルファベットでヘボン式のローマ字が書けるようにする。毎年，中学1年生の授業内容に入る前に，ペンマンシップを使ってアルファベットの指導授業をしている。

【小中連携の課題】

・小学校英語活動，中学校の英語の学習内容をお互いにもっと把握する必要がある。

・小学校英語活動で扱っている，クラスルームイングリッシュや児童へのリアクション一覧表を共有する。
小学校と中学校の言語材料を，比較検討していく。

【留学生との交流活動の検討】

・小学校は，日本の文化紹介のプレゼンテーションと日本の遊びの紹介の2本立てで行っている。
プレゼンテーションは，クイズ形式で紹介している。

・中学校は，「学校紹介」を寸劇にし，グループでプレゼンテーションを行っている。その後，留学生からの質問に，即興で答えることも課題としている。

・現時点で，プレゼンテーションの発表の仕方は小学校から中学校では難易度が上がっているだけでなく，児童生徒の実態にも合っていると考えて，引き続き生かしていく。

・小学校，中学校で扱っている言語表現や語彙については，整理をしていき，系統的な学びを検討していく。

６．研究の成果と今後の課題

本年度の成果は，１）本研究プロジェクトによって小中連携を行うことを始動したこと，２）小学校教員，中学校教員とも小中連携に向けての情報交換を行えたこと，３）これまでのお互いの留学生との交流実践について整理すると共に，お互いに共有することができたこと，４）すぐに連携できるものについて，①指導者のクラスルームイングリッシュの共有（表1），②学習者のリアクション表現など useful phrases & expressions の共有（表2），③小学校でのアルファベット学習の強化として，6年生3学期にペンマンシップを用いた学習の開始，を行えたことである。課題としては，コロナ禍においても，１）留学生との交流活動における言語表現や語彙等の一覧表づくりと，２）系統的なカリキュラムの作成とその実践を行うことである。また，３）留学生との交流学習での児童生徒の学びをどのように評価していくのか，そして，４）その有効性をどのように測定していくのかについても，文献や先行研究も含め，引き続き検討していかなければならない。

表１　指導者のクラスルームイングリッシュ

1）	授業はじめのあいさつ ※ワンパターンにせず、バリエーションをつけて authentic にする。 Good morning, everyone. / Hi, everyone. / Hi, there. / How are you, today? /How are you doing? /How have you been? / How was your weekend?
2）	授業中の指示　※できるだけ、簡潔な英語表現にする。 Open your textbook to page 10. / Take your cards. / Put away your cards. / Talk in a pair.
3）	誉め言葉 ※バリエーションをもって、具体的にほめるとなおよい。 Good job. / Well done. / You did well. / Your pronunciation is very good. / Your voice is clear.

表２　Reactions and Useful Expressions

1）	あいづち　Uh-huh. / I see. / Right. / OK. / Me, too. / Really?
2）	聞き返すとき　Pardon? / One more time, please. / Sorry. I can't hear you. / Again, please.
3）	ちょっと間を取るとき　Well. / Let me see.
4）	感嘆・感心・興味を示すあいづち (That's) right. / That's good. / That's great. / That's nice. / That's so sweet. /That's wonderful. / That's interesting. / (That) sounds right. / That sounds good. / That sounds great. / That sounds nice. That sounds interesting. / That sounds yummy.
5）	同情的なあいづち　That's too bad. / That's terrible. / That's unbelievable.
6）	相手に尋ね返す　How about you?
7）	さらに詳しく聞く　Why ? / Where? / When? / Who? /　With who?

７．参考文献

青柳有季（2017).「学び合いを促す表現活動の工夫」『東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要』54，pp.275-336.

アレン玉井三江（2010).『ストーリーを中心とした英語活動』旺文社

浦田貴子・柏木賀津子・中田葉月・井出眞理（2014).「コミュニケーション能力の素地から基礎へと結ぶ小中連携リンクユニットの創造―事例学習と規則学習の繋がりを通して―」.『小学校英語教育学会紀要』l14，pp.244-259.

喜多容子・福井英子（2017).「小中の円滑な接続を図るために―カリキュラムと指導の工夫―」『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』8，pp.25-34.

時事通信出版局編（2017).『授業が変わる！新学習指導要領ハンドブック中学校英語編』時事通信出版局

髙野美千代・加藤宏（2014).「小学校外国語活動における小中連携の課題と方法」『山梨県立大学国際政策学部紀要』9，pp139-150.

田中千絵（2016).「小学校外国語活動と教科としての中学校英語の在り方 - 共同で構築する小中連携を目指して―」『山形大学院教育実践研究科年報』7，pp152-159.

中村香（2019).「第6学年『日本の文化を英語で紹介しよう』～留学生との交流活動～」『東京学芸大学附属小金井小学校紀要』第41集，pp87-90.

中村典生（監修）・鈴木渉・巽徹・林裕子・矢野淳（2019).『コア・カリキュラム対応小・中学校で英語を教えるための必携テキスト』東京書籍

フレッド・M・ニューマン（著），渡部達也、堀田諭（訳).（2017).『真正の学び / 学力』春風社

文部科学省.（1997年7月19日).「文部省 審議会答申等（21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申））」.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701n.htm より R2年5月30日に取得

文部科学省（2008).『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』

文部科学省（2017a).『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説　外国語活動・外国語編』

文部科学省（2017b).『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　外国語科編』

文部科学省（2020年7月17日).「平成30年度「英語教育実施状況調査」の結果について」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415042.htm より R2年8月15日に取得

ユーリア・エンゲストローム（著），松下佳代，三輪健二（訳）（2010).『変革を生む研修のデザイン』鳳書房

萬谷隆一・直山木綿子・卯城祐司・石塚博規・中村香恵子・中村典生（2011).『小中連携 Q & A と実践小学校外国語活動と中学校英語をつなぐ40のヒント』開隆堂出版